

## H18年度 大台ヶ原自然再生推進計画評価委員会 ニホンジカ保護管理部会（第一回）議事録

日時：平成18年12月12日（火） 13:30～16:00

場所：大阪マーチャンダイズマートビル：2階第4会議室

出席者

委員

座長 村上 興正 元京都大学 講師

委員 高橋 裕史 森林総合研究所関西支所 生物多様性グループ

高柳 敦 京都大学大学院農学研究科 講師

田村 義彦 大台ヶ原・大峰の自然を守る会 会長

高田 研一 高田森林緑地研究所 所長

鳥居 春巳 奈良教育大学教育学部付属自然環境教育センター 助教授

横田 岳人 龍谷大学 講師

（敬称略）

関係機関

近畿中国四国森林管理局三重森林管理署	流域管理調整官	莊司 庄一
奈良県農林部森林保全課	主査	若山 学
三重県環境森林部自然環境室	主査	前川 哲也
上北山村地域振興課	主事	松島 克典
吉野きたやま森林組合	代表専務理事	富室 良城
	技師	下吉 博之
社団法人三重県獣友会	会長	中世古 大輔

事務局

環境省：近畿地方環境事務所

統括自然保護企画官 小沢 晴司

野生生物課長 高橋 勝志

自然保護官 石川 拓哉

自然保護官 西野 雄一

財団法人自然環境研究センター 主席研究員 黒崎 敏文

主席研究員 永津 雅人

研究員 岸本 年郎

株式会社環境総合テクノス 自然環境グループリーダー 樋口高志

挨拶（環境省近畿地方環境事務所小沢統括）：

この部会は、大台ヶ原自然再生推進計画に基づく3本柱の部会の一つであります。

まず報告ですが、先日の中央環境審議会で自然再生推進計画に明記されていた利用調整地区の導入が承認されました。これは、自然公園法に基づく入山コントロールを行う利用調整地区の導入が確認されたもので、知床、小笠原なども検討にあがっておりましたが、これらに先駆けて全国初の利用調整地区として設定する方向が確認されたというものです。大台ヶ原は原始性、静寂性が高い地区として、認められたということでもあります。

本日は今年度の事業調査の報告とともに、大台ヶ原ニホンジカ保護管理計画のうち基本的な方向性についてご議論いただきたいのでよろしくお願いします。

■出席者紹介・資料確認

■議事

議事1 平成18年度事業実施状況について

（環境省よりワーキンググループの議事概要について説明。）

吉野きたやま森林組合：

テレメトリーをつけた個体は東大台での観光客に人気があり、そのせいで、東大台に居ついている個体ではないかと思うが、そのあたりの議論はあったのか。

村上委員（座長）：

これがどういうことが現段階では4頭のみの結果で結論を出すのは早いのではないかと考えている。西大台の個体にもテレメトリーをつけたいと考えており、また、隔年の調査ではなく、毎年にしたいという話もしている。GPSのデータは重要な問題で今後さらなる検討が必要と考えている。

（環境省・事務局より資料「平成18年度事業実施状況」について説明）

<植生保全対策実施状況について>

（特になし）

<個体数調整実施状況について>

田村委員：

糞粒法の計算式が変わったというのはわかるのだが、密度のデータの数値がこれまでの資料と大きく変わっていたり、値が低くなっている場所があるのはなぜか？

事務局（黒崎）：

今回新しい計算式で再計算したので、全部数値は異なる。図1-3にあるように、数値が高くなるものもあるし、低くなるものもある。

<GPS発信機による行動圏調査について>

村上委員（座長）：

冬季には低標高地に降りるという季節的な移動が明確になったこと、今回の装着した東大台の4個体が西大台には行ってないことがわかったことの2点が非常に興味深い結果である。

森林組合：

2月という時期に大台に戻っているデータが出ているが、この冬は雪解けが早く3月半ばには人も歩けるくらいになっていた。そのようなことが関わっているのではないか。積雪量との相関が大切かと思う。

田村委員：

3頭が尾鷲道の堂倉山から地池高を経て岩井谷源流の急傾斜の斜面を下って別々の越冬地に達しているが、このようなルートをたどった理由は分からぬ。

事務局（黒崎）：

栃木、群馬県など関東における越冬地は1つの斜面に50頭とか100頭が集中し、個体が行き来する決まったルートがある場合がある。そのルートを利用した一斉捕獲も可能で、一度に密度もさげられる。大台の場合は大規模な越冬地はないようで、良い餌場を求めて降りているというよりは、積雪を避けて下山している可能性があるかと考えられるが、はっきりしたことはわからない。

村上委員（座長）：

このデータだけで議論して、結論づけることはやめたい。もう少しデータを蓄積して解析する必要がある。詳しい検証をしたあとで、結論を出したい。積雪量については重要と考えており、どうすれば効率よくデータを得られるかは議論になっている。また、銃器を使った冬季の捕獲についても積雪量は重要なデータである。越冬地が特定の場所でないのが興味深いデータである。ワーキンググループなどでは越冬地での状況も調査するべきという話もれている。三重県側の冬季に利用している場所について情報はあるか？

三重森林管理署：

そのあたりの林道は台風の影響で道が通行止めになっており、今は調査を行っておらず、現在の状況は把握できていない。

高柳委員：

図1-7を月ごとの平均値にして、実線で結ぶのは誤解を招く可能性があり、良くない。生のデータをそのままプロットした方が良い。移動については積雪だけではなく狩猟や獵期の活動影響も考慮して、分析する必要がある。

村上委員（座長）：

データの有用性は高いが、まだまだ関係付けて検討するべきことが多いと思う。しかし保護管理に役立つ重要なデータなので、毎年データを取りたいという話になっている。

＜下層植生調査＞

村上委員（座長）：

ここではミヤマシキミがずいぶん食べられてきているというのがシカの密度の影響ということで大きな話かと思う。今後も引き続き注目すべき。

## 議事2 これまでの事業実施結果の評価について

(環境省・事務局より資料「これまでの事業実施結果の評価」について説明。)

### <シカ生息状況調査と個体数調整の結果と評価について>

鳥居委員 :

9ページに西大台でも近年減少傾向が見られると記載されているが、減少しているとはいえないのではないか。

村上委員(座長) :

減少していないとした方が良いのではないか。文章を見直してください。5年に一度の調査でそこまで結論することはできないし、区画法のみでなく、糞粒法を加えて、合理的、科学的結論が出るようにしたい。生息密度調査の結果をどう評価するかは、ワーキンググループで詳細に検討する。

横田委員 :

区画法の結果からは、減っているとはいえないだろう。糞粒では一時期減っているように見られた時期があり、西大台の下層食性の衰退で、食べるものが無くなり減ったのではないかという議論があった。

田村委員 :

生態学会が示している自然再生の指針には、第三者機関の評価を求めるべきということが記載されているが、この部会についてはどう考えるか。

村上委員(座長) :

もちろん第三者機関による評価も必要と考えるが、その前に自己評価を行うことも必要ではないかと考えている。現在おこなっていることは自己評価であり、それをどれだけ客観化できるかが課題と考えている。

(休憩)

### <林野庁の三重県での取り組みについて>

森林管理署 :

大台ヶ原に隣接する大杉谷国有林が約5,800haあるが、そのうちの1400haを平成3年に大杉谷森林生態系保護地域に指定し林野庁独自の保護林の制度を定めた。その中で平成10年から大杉谷国有林のシカによるトウヒ等への食害が発生しているということでラス巻を実施してきた。平成10年、11年は請負で事業を実施し、12年度から17年度までの5年間請負と併用して、ボランティアによるラス巻を実施してきた。過去に巻いたラスがさびてきたので、H18年度から新たなラス巻を開始した。500~600本ボランティア及び臨時作業員を雇つ

て実施した。また、1.7ha の防護柵を作成、糞粒調査も今年度から開始しており、現在取りまとめ中、2~3年は継続したいと考えている。

グリーンサポートスタッフによる年間 80 人日（2 人）のパトロールも開始した。ごみの収集、林内に入らないなど登山者マナーの向上、国有林の PR などに努めている。これは 100 名山の利用マナー向上の一環で林野庁が作った計画で、直接シカ被害の問題を扱うものではないので、ご理解願いたい。

村上委員（座長）：

今の話について、資料をいただけないとありがたい。

森林管理署：

後日、環境省へお渡ししたい。

村上委員（座長）：

三重県側の生息密度が増大している傾向があるが、これはどういうことか。

森林管理署：

大台ヶ原の防護柵に設置によって三重県側にシカが移動しているのではないかとも懸念している。16 年の台風以来、人が入れなくなっているので、宮川村がシカの餌場になっていることも考えられる。

三重県獣友会：

県内で年間 500 頭くらい捕獲している。楠田川を境として南の方、熊野まではメスジカを捕獲できることになっていて、捕獲数は増えていると思う。最近では炭焼きが減ったが、炭焼きで伐採をするとシカが集中する傾向があるということは感じている。森林が鬱蒼と発達すると皮剥ぎがなされたり、その場所から去ってしまうのではないかと感じている。参考になればと思い申し上げる。

村上委員（座長）：

三重県側の捕獲個体数は奈良県にくらべると少ないとも思われる所以、今後検討をお願いしたい。

### 議題 3 次期計画に関する基本的な考え方について

（環境省・事務局より資料「次期計画に関する基本的な考え方」について説明。）

村上委員（座長）：

植生の保全再生のところは森林生態系部会のグループで行っているところなので、それをしっかり位置づけようというのがある。

高田委員：

いろんな捕獲手法を講じたとしても、捕獲効率が下がっていくことは考えられるで、1 年間の上限値を設けるのではなく、計画頭数以上取れれば取るということは可能なのか。

事務局（黒崎）：

その点も含めて次回の部会には数値を出し、ご検討頂きたい。

森林組合：

今年はクマが多く目撃されたが、この計画の中に、組み入れることはないのか。

環境省：

この保護管理計画はシカに限ったものなので、この計画にクマやサルについて組入れるということはないが、必要があれば自然再生の中で別途検討するということはあり得ると考えている。

村上（座長）：

クマの対策は重要だとは思っている。もともと大台にいたものもあるし、重要な構成要素だと思うので、必要であれば検討することもあっても良いと考えている。

田村委員：

防鹿柵がいきあたりばったりで作られてきたと思うが、東大台の45%を占めているのではないかと思うが、それを再検討するということはないのか。

村上委員（座長）：

当初は植生を守るためにとにかく防護柵を作ろうということで行ってきたが、防鹿柵のほかにも一時的に守れば良いというパッチディフェンスなど新たな試みも行いつつあり、当初より柔軟な方向になってきていると思っており、評価すべきと考えている。

環境省：

植生保全対策については、次期計画の検討の中で、考え方を整理して設置方針についてお示しすることしたい。

高柳委員：

これだけ東大台に防鹿柵が張られていて、シカの密度が落ちていないとすると柵外にはさらなる採食圧がかかっている可能性がある。どこに防鹿柵を張って、どうモニタリングしていくかという計画性がないとならない。柵を張らない場所への圧力のモニタリングを含め、防鹿柵という保全手法を計画の中でしっかり位置づけることが必要と考える。

傍聴席より：

評価委員会は生ぬるいのではないかと思っている。例えば捕獲の達成率が低いのも、予算を使っているので生ぬるいと考えている。発信機については興味深い、良い調査であると思う。西大台のものにもオスにも発信機をつけてしっかりした科学的データを出してもらいたい。

村上委員（座長）：

特別保護地区内で銃器を使って射殺するという判断になかなか踏み込めなかったことの問題が大きいと思うが、それも考える時期になってきた。

田村委員：

自然保護団体の立場から補足したい。今の傍聴席の発言は本会の会員ですが、銃器を使って早く殺せと言っているように聞こえるかもしれないが、趣旨はそういうことではなくて、

環境省が怠慢であるということなので、誤解のなきよう願いたい。

傍聴者：

検討会で殺した方が良いと決めて行うのであれば、しっかりと目標も達成してもらいたい。検討する検討すると先延ばしにして、予算を使うのは良くないと言っている。しかしながら調査にはしっかりと予算をかけて行ってもらいたい。

鳥居委員：

早く殺すことによって、撃つ個体数、トータルで殺す頭数を減らすこともできる。

村上委員（座長）：

早く殺すことによって、失う生命の数もずっと減る。

#### <ミヤマシキミについて>

傍聴者（谷）：

不嗜好植物といわれていたミヤマシキミが食べられているというが、何割くらいが食べられているのか。

事務局（樋口）：

どれだけ食痕があったかというのを数を数えて調べていないので割合はわからないが、食べているのは葉が若いときや実も食べている。成熟した濃い緑色の葉はあまり食べられていない。

高柳委員：

滋賀県でもミヤマシキミが食べられているという報告もある芦生では不嗜好性植物のエゾユズリハが消失するくらい、食べられている。

村上委員（座長）：

アセビもどんどん食べられているし、昔、忌避植物と言われていたものがそうでなくなっている。

横田委員：

場所によって随分違いはあるが、柵の外にあるミヤマシキミは新芽に限っていえば半分くらいは食べられているのではないか。新芽の味はお茶の葉とよく似た味で、人間が食べても美味しい。シカが食べるのも無理ないと感じている。昨年の春先にミヤマシキミの花の次期の観察では柵の中では花ざかりだが、外はほとんど花がついていないという状況があり、かなりプレッシャーを受けていると感じた。

高田委員：

個人的な観察では平坦な面で多いなど地形の影響、それと株の大きさも食べられる食べられないに関わってくると思っている。平坦で大きい株ではよく食べられている。現場では小さくなっている株が出てきていると感じている。シャクナゲに被害が及ぶことも懸念される。

村上委員（座長）：

植生モニタリングの中でどういうことをポイントに見るかということも考える必要がある。

忌避植物がどれくらい食べられているかも調べても良いかもしない。シャクナゲも場所によっては採食されている。

<今後のスケジュールについて>

環境省：

今回の部会が第1回目で、第2回目を1月下旬をめどに開催したいと考えているので、よろしくおねがいしたい。それまでに関係の委員の方に集まつていただき、個体数調整と植生保全対策について詳細を検討をさせていただきたいので、お願ひします。

また、関係機関の方には資料提供をお願いすることもあると思うが、ご協力願います。

以上